

二 諸經典における記述

例えば『悲華經』卷第一「転法輪品」第一(大正3, 167a)に於いては阿難は阿羅漢では無いことが明記されている。「如是我聞。一時佛在王舍城耆闍崛山。與大比丘僧六萬二千人俱。皆阿羅漢諸漏已尽無復煩惱。一切自在。心得解脫。慧得解脫。(中略)唯除阿難。」とある。

三 浄土三部經における記述

無量壽經は五訳共に、阿難は阿羅漢である。『佛說無量壽經』(大正12, 265c)を例にとれば、阿難も他の比丘達と同様に阿羅漢である。「我聞如是。一時佛住王舍城耆闍崛山中。與大比丘衆萬二千人俱。一切大聖神通已達。(中略)尊者阿難。皆如斯等上首者也。』『佛說阿彌陀經』(大正12, 346b-c)及びその異訳も同様である。但し『觀無量壽經』(大正12, 340c-341a)では「如是我聞。一時佛在王舍城耆闍崛山中。與大比丘衆千二百五十人俱」となっているのみで明白ではない。

大乘仏教教団の連帯感

——「善男子善女人」の原意——

阿 理 生

大乘の諸種の經に、*bodhisattva* (菩薩)と並んで、しばしば *kulaputra*, *kuladuhir* (漢訳 善男子、善女人/族姓子、族姓女)の語が見える。これらの用語に関して、近現代の辞書的記載や解説のほか、平川彰の研究(『平川彰著作集第三卷』平成元年所収)や植木雅俊の研究(『仏教のなかの男女観』平

成十六年所収)があるが、その本質的概念について十分に解明されたとは言い難く、まだ研究の余地があるようである。

初期仏教パーリニカーヤには、アンバッタというバラモン青年のことを仲間のバラモンが *kulaputta* と言うとき、その語は前後の文脈からして、古代インド世俗社会の厳格な階級差別と密接に関わっていることが知られ、この場合 *akula* という卑しい下層階級集団との対比で、*kula* (= *sukula*) という高貴で良きバラモンなる上層階級集団が意図されている(PTS版 DN.1, p. 93)。そして一方では仏陀を師とする出家者集団(サンガ)に属する者もまた *kulaputta* と呼ばれているのを見出す(MN.1, p. 161; p. 205; MN.3, pp. 269-270. etc.)。

同一の *kulaputta* の語が在家者にも出家者にも使用されていることになるが、その意味合いは同一ではあるまい。後者の出家者には上層のバラモンから下層のシュードラ階級の出身者までが入門を許され、出家前の階級(生まれ)が問われることはないから、出家者に対して言われるところの *kulaputta* とは、世俗の差別的な社会階層における意味を離れて、「(仏陀を師とする出世間の)すぐれた出家者集団に所属する者」の意味合いに転用されていることが明らかとなる。*kula* は基本的に「家柄・家系」のことではなく、「同類の群れ・階層集団」であるからである。「英語の *clan* はこの *kula* と類縁関係にある可能性がある」

大乘の始原に位置する『八千頌般若經』では、出家の比丘・比丘尼と在家のウパーサカ・ウパーシカーという四衆が直後の文脈で *kulaputra*, *kuladuhir* の語で言い換えられ (Vaidya

ed., p. 25) またその kulaputra, -duhitṛ が説教師となり (p. 100)、四衆の前で心おびえることなく語り (p. 42)、菩薩の誓願を立てて菩薩乘にて修行し (p. 113)、智慧パーラミターに習い学び行ずる者は菩薩大士と同様である (p. 104) とされる。そして文脈の中で、菩薩大士の語が kulaputra の語に置き換わり (p. 7)、また逆に、しばしば kulaputra, -duhitṛ が菩薩大士の語に置き換わる (p. 31; pp. 104-105, etc.)。以上の『八千頌』における特質は後の『法華経』等にも見出される]

『八千頌』における kulaputra, -duhitṛ は、「出家をも含む点で世俗社会の「良き階層集団の男子・娘」の意味ではなく、すでに見たように、初期仏教において出家者集団に属する者に適用されたところの意味合いがここに思い起こされるべきである。『八千頌』のそれもまさに、「(その勝れた大乘の経を奉じる) 教団に所属する者」という意味合いで使用されている感が強い。その語には、世俗社会のうちでいかなる階層に属しているようにも、同一の教団に属するという同族意識と連帯感とを含んでいることが窺われるのである。「同志、同朋、同行」の語感にも通ずるものがある。無量無数の衆生を導き利益する自利利他円満の菩薩道を行ずるといふ高い浄らかな同一の志を有する集団の一員であるとの深い自覚が、bodhisattva の語同様に kulaputra, -duhitṛ の語にも込められまた願われているように思われる。またそれゆえに、呼びかけにその語が使われるとき、自ずから敬意的表現の響きを感じさせるものになっているようである。

『阿毘達磨俱舍論』における作用の意義

日比 佑 香

現代の科学では自然現象は様々なカテゴリーに細分化され、それぞれにおいて独自の発展を遂げているように見える。とりわけ物理学には、力学、電磁気学、熱学、素粒子学、量子力学など様々な分野がある。しかし、これらの現象は決して互いに無関係なものではない。物理学というものは、自然の中に統一的な法則を見出し、自然のありのままの姿を理解しようとする学問であるからである。物理学を統一的に理解しようとするとき、その要となるものがエネルギー (energy) である。すべての自然現象は例外なくエネルギーの与奪によって行われている。生命活動をはじめとして、太陽の光や気候、重力や風、音までも、我々の知り得るすべての自然現象がエネルギーの流れで説明され得るのである。すなわち、絶えず移り変わるエネルギーの流れを説明することが物理学の統一的な目的なのである。

説一切有部は、とりわけ人間の認識範囲内に留まるが、様々な自然現象を七十五の法 (dharma) に分類し、その全貌をこれら少数の統一的法則で理解しようとした。その教理の中心において作用とは七十五法の中には含まれてはいないが、無為法を除く全ての法において為し得る性質である。説一切有部に依れば、三世にわたって法は存在し、作用の区別に依って過去・現在・未来が決定するのであるから、たとえ法が存在していても